

## 刊行にあたって

—「原点」の胎動への期待—

『立命館大学人文科学研究所紀要』は2013年3月刊行の本誌をもって通算100号を刊行する運びとなった。ここに至るまで本誌は、論稿を寄稿していただいた学内外の諸研究者の方々、歴代の事務の担当の方々をはじめ多くの方々に支えられてきた。本誌を支援し、また暖かく見守って下さったそれら多くの方々に、この場をかりて心よりお礼申し上げたい。

本誌は戦後日本の独立の直後である1953年5月に創刊された。記念すべき創刊号は「末川博士還暦記念」特集である。同号には後に本学総長に就任する細野武男、天野和夫両氏を始め、北山茂夫、林屋辰三郎、奈良本辰也といった各分野を代表する研究者が健筆をふるっている。続く初期の各号には、白川静（2号）、梅原猛（4号）、谷岡武雄（5号）など、本学が誇るそれぞれの分野の代表的研究者の名が散見される（以上本誌収録「総目次」参照）。本誌は1950年代末葉までは年1冊の刊行だったが、1960年代以降は、変則的ではあるが、年2冊刊行の年も見られるようになり、1980年以降は年3冊刊行も認められる。この相違は原稿の集まり具合と刊行予算に規定された結果と考えられる。

大きく言えば、本誌は特定のテーマにそって編集された特集号と、統一したテーマを冠せず、さまざまな分野の自由な投稿論文によって構成される通常号に区分される。特集号は人文科学研究所のもとに編成された共同研究の研究成果であり、内容的には①京都および近郊の地域をフィールドにした地域研究、②当該時期の学会の関心と照応したもの、③必ずしもそれらに一括できない多様なテーマに大別できるであろう。改めてこれらの蓄積を通覧した時、本特集号のテーマの中には当該時期の学会の中心的な問題関心も一部

投影されてはいるが、総体的には時々の学会の潮流に強く縛られることはなく、比較的自由的なテーマ設定がなされていることに気づく。その点大学附置の研究所の特色が生かされており、今日でも色あせない論考が散在する理由でもあると言えよう。地域史に即したテーマ設定が多くみられるのもこの点と関係がある。その中には調査報告書的なものや（9号）、史料集的なもの（12号・34号）もあり、これらは今日でも依然史料的価値を失っていない。目前の政治社会問題に敏速に対応するフットワークのいい研究も必要ではあるが、こうしたデーターを活用した重厚な基礎研究は大学附置研究所の持ち味とも言えるものである。こうした基礎研究が継続的に息づいていることは、教育研究機関としての大学が有意義な学問の再生産を行う重要な足掛かりである。基礎研究がともすれば冷遇されがちになかにならなくて、それが息づく環境をぜひ大切にしていきたい。

その点も含め、本誌100号分に蓄積された研究成果は、大学附置研究所が成すべき研究は何かという模索の反映である。まずはその軌跡を真摯に振り返ってみたい。それに向けて、1号から100号までの総目次を収録した。これは今までもホームページ上で公開していたデーターであるが、改めて紙媒体に落としたことによって本誌の歩みが簡便に通覧しやすくなったと思われる。英文年報の目次、写真を付載した19冊に及ぶ立命館大学人文科学研究so研究叢書の目次とともに、本研究所の研究活動の成果を総覧できる記録として活用し、今後の研究計画の策定の参照材料として生かしていきたい。

では本研究所の今後の研究活動はいかにあるべきか。それは人文・社会科学の未来展望とも深くかかわる難問であるが、人文科学研究soに関与する研究者にとって避けて通れない問題である。避けて通れないのならば、失敗を恐れて尻込みするのではなく、果敢に向き合いたい。その準備作業として、人文科学研究soで現在推し進められている共同研究の現状を開示し、共通理解を深めることが必要と考え、人文科学研究soの中に組織されている共同研究の代表者の方々に、研究会とその研究活動の概要について寄稿いただいた。

人文科学研究所の研究活動の中核をなす共同研究には①**研究所重点研究プログラム**、②**助成プログラム**という2つの系列が存在する。①は研究所の戦略拠点となるような、予算規模の大きな研究会であり、おおむね3年をごとに研究テーマを更新しながら運営されている。現在「**近代日本思想史研究会**」(代表：法学部教授 赤澤史朗)、「**グローバル化とアジアの観光研究会**」(代表：文学部教授 藤巻正己)、「**グローバル化と公共性研究会**」(代表：国際関係学部教授 松下冽)、「**間文化現象学研究会**」(代表：文学部教授 谷徹)、「**暴力からの人間存在の回復研究会**」(代表：文学部教授 加國尚志)の5つの研究会が置かれている。現在の本研究所の研究成果の大部分は、これらの研究会の活動を基礎としたものであり、まさに本研究所の研究活動の骨格となる研究会である。②は30～50万円の予算規模で推進される比較的小規模な萌芽的研究会であるが、将来的には本研究所の研究活動の一翼を担う研究会への成長が期待されている。現在「**大学の自治の制度構想研究会**」(代表：法学部教授 中島茂樹)、「**人文科学方法論研究会**」(代表：産業社会学部准教授 筒井淳也)、「**戦後沖縄の基地・都市研究会**」(代表：文学部准教授 加藤政洋)、「**比較ポピュリズム研究会**」(代表：産業社会学部准教授 加藤雅俊)、「**京都戦後史学史研究会**」(代表：文学部教授 田中聡)が置かれている。

これらの代表者に寄稿していただいた各共同研究の活動概要を通覧いただければ、現在本研究所が取り組んでいる研究活動のほぼ全容が概観できるはずである。特に①の研究所重点研究プログラムに関しては、研究代表者だけでなく、参加する若手研究者に研究会活動の中での経験などを自由に寄稿していただいた。若手研究者がこれら研究会への参画と協力を通じて、旺盛な研究活動を繰り広げていることが理解いただけれると思う。苦勞も多いことが伺い知れるが、われわれの想像以上に若手研究者が研究会活動への参画を通じて豊穡な経験を積み、彼等がそれを成長の糧としてくれているのであれば、研究会を主宰する側としてこれほど勇気づけられることはない。

そしてこれら研究会の活動を踏まえ上で、本研究所における今後の研究活動のあり方を模索すべく①の研究所重点研究プログラムの代表者の方々5人にお集まりいただき、対談という形で討議を行い、その記録を収録することにした。過去を振り返る企画も考慮に入れなかったが、これから先を見据えることがより重要と考えたためである。

対談を実施するにあたって、はたして分野を越えた観点から研究内容に踏み込んだ討議が盛り上がるのか懸念されたが、その懸念は杞憂に終わった。詳細は収録した対談の記録をお読みいただきたいが、分野は違えど各代表者の問題意識は共鳴し合う点が多く、むしろ問題意識の共通点を自覚しながら、その境域にそれぞれの分野からどのようにアプローチするべきかという点に討議は焦点化された。それは司会者として参加したにすぎない私にとっても、学問は人を分離するものではなく、人を結びつけるものであることを実感させられ、その感覚が滋養となって研究へのモチベーションが駆り立てられる貴重な機会となった。それは同一分野の研究者と議論するだけでは味わいにくい境地であり、「交流」と言うに値する異なった学問分野間の意味ある交渉は各研究者がこの境地を共有することなしにはあり得ないと思わせるような心地よい高揚感でもある。手前みそに聞こえればお許しいただきたいが、活字の上では伝わりにくい対談の雰囲気も含めて、諸学問間の交流の深化に向けたわれわれの問題提起を汲み取っていただければ幸甚である。

この他に小特集として近代日本思想史研究会の成果である日本近代憲政史関係の学術論文3本を収録した。いずれも若手研究者の手になる問題提起的な野心作である。あわせてこちらの方も御味読いただきたい。

100号に及ぶ歴史を振り返ってみて改めて頭をよぎる問題がある。それは研究所紀要の在り方、位置づけに関してである。率直に言えば、これまではどの学問領域においてもほぼ例外なく、学生の論文指導を行うに際してはまず査読の厳しい外部の全国学会誌への投稿を勧め、それに採用されなかったもの、もしくは当初よりそれに採用されそうにないレベルのものを研究所紀

要に掲載するという序列があったように見受ける。これは学生が就職公募を勝ち抜くためには社会的評価の高い全国学会誌に掲載された論文がある方が有利との指導教員の判断も働いている。もちろんこれが全面的に誤りというのではなく、厳正な査読を誇る全国学会誌の存在は必要であり、それを突破しようという気概は大切にしなければならない。

だが他方でこうした姿勢が逆に代表的な全国規模の学会が当該分野の最高水準を維持する条件を奪っているという落とし穴も間々見受けられる。なぜならそこへの掲載を優先するあまり、投稿者が大胆な議論を避け、瑕疵を指摘されない紋切り型の論議に安住した無難な論稿をまとめる傾向が目立ち始めているからである。この傾向が蔓延するにつれ、試論、仮説といったものは消滅し、ついには論理ないしそれを立てようという姿勢自体が消失する。そしてそこに居直り、論理の不在を指摘されると、論理の構築にいとまうとする姿勢への嫌悪感や敵意すら示しはじめる。この先に待ち受けているのは、まぎれもない学問の凋落と死滅である。

そうした致命的な事態に立ち至ることは何としても避けなければならない。その際に有力な媒体として大学・研究所紀要の存在意義を改めて見直し、もっと効果的に活用できないであろうか。珍妙な所説に門を開けと言うのではもちろんないが、全国学会誌に希薄となりつつある議論を奨励、活性化する媒体として大学・研究所紀要の存在価値をもっと意識的に引き出していく必要があるのではなかろうか。既存のディシプリンに縛られない大胆な論議を提起したくともその媒体が見いだせず、忸怩たる思いを抱えている若手研究者は数多存在する。大学・研究所紀要は、そうした気概のある若手研究者が萎縮せずに縦横に議論を展開できる苗床たるべきではないか。そして進んで生命力の横溢した「原点」の胚胎に力を貸すべきではないか。やがてその逞しい「原点」の胎動は、大学・研究所に活力を与えてくれるであろう。そのスリリングな往還関係を創成し、人文・社会科学の未然の可能性の開削を図りたいと願うのは、私だけでは無かろう。立命館大学人文科学研

究所紀要が、幾年かの後に成長した各分野の研究者に「すべてはここから始まった」と手にとってもらえるような媒体になることを念じて、この100号記念号を世に送りたい。

なお本号の刊行は、本研究所において長らく共同研究を主宰してこられた赤澤史朗先生（法学部）と松下冽先生（国際関係学部）のご退職と重なることとなった。

最後になったが、両先生の今後のご活躍を祈念するとともに、貴重な論稿を寄稿していただいた各先生、若手研究者の方々、ならびに刊行の段取りから、すべての原稿を通覧して編集作業を統括していただいた中島久美子さん（リサーチオフィス（衣笠））、煩瑣なデータの打ち込みと校正作業に尽力していただいた眞杉侑里さん（文学研究科博士後期課程）に改めて感謝したい。

2013年3月

立命館大学人文科学研究所長

小 関 素 明